



RYUKOKU
UNIVERSITY

You, Unlimited

Ryukoku

広報誌「龍谷」

2025
VOLUME 100

先端理工学部 安田 心さん

Brand Story

世界は驚くべきスピードでその姿を変え、
将来の予測が難しい時代となっています。
いま必要なことは、「学び」を深めること。
「つながり」に目覚めること。
龍谷大学は「まごころある市民」を育てていきます。

自らを見つめ直し、他者への思いやりを発動する。
自分だけでなく他の誰かの安らぎのために行動する。
それが、私たちが大切にしている
「自省利他」であり、「まごころ」です。
その心があれば、激しい変化の中でも本質を見極め、
変革への一歩を踏み出すことができるはず。

探究心が沸き上がる喜びを原動力に、
より良い社会を構築するために。
新しい価値を創造するために。

私たちは、大学を「心」と「知」と「行動」の拠点として、
地球規模で広がる課題に立ち向かいます。
1639年の創立以来、貫いてきた進取の精神、
そして日々積み上げる学びをもとに、様々な人と手を携えながら、
誠実に地域や社会の発展に力を尽くしていきます。

豊かな多様性の中で、心と心がつながる。人と人が支え合う。
その先に、社会の新しい可能性が生まれていく。
龍谷大学が動く。未来が輝く。

You, Unlimited





広報誌「龍谷」

01 P01 Feature Article

巻頭特集 学長対談

「ケア」が紡ぐ人と未来

上智大学

外国語学部教授 龍谷大学学長

小川 公代 × 安藤 徹

02 P06 Ryukoku News

- ・新たなキャンパスから生まれる 新たな龍谷大学
- ・環境サステナビリティ学部(仮称)・情報学部(仮称)
- 2027年4月 瀬田キャンパスに開設予定(仮称・設置構想中)
- ・2025年9月、深草キャンパスに
- 学びの総合窓口「Campus HUB」を開設

03 P10 100 Issues, Ryukoku's Story

創刊100号記念

広報誌「龍谷」がつむぐ龍谷大学の歩み

04 P12 People, Unlimited

体を支えるたんぱく質のいっそうの摂取を
全国規模のフォーラムで食育普及の企画を提案
吉本 莉香 さん 農学部

P14

龍谷大学初の快挙。高い自己効力感で
超難関の海外大学博士課程に特待生として進学
檜 雄詞 さん 国際学研究科修士課程特別専攻生

P16

「龍谷の森」でマツタケの生育・収穫を
大学の重要プロジェクトとしての継続も目標
安田 心 さん 先端理工学部

05 P18 Education, Unlimited

"学部を越えてスポーツを学ぶ"

日本初のコース開設から30年

松永 敬子 教授 経営学部 スポーツサイエンスコース運営委員長

P22

学生と生徒が心で繋がる
学校現場での心理的支援実習がスタート

内田 利広 教授 心理学部

小田 愛翔 さん 心理学部

06 P26 Research, Unlimited

世界初。水に溶けて自然に還る、
花火の玉皮の開発に成功

中沖 隆彦 教授 先端理工学部

P30

司法における方言の役割
～被疑者の権利と人生を守り、冤罪を防ぐ「砦」

札埜 和男 教授 文学部

07 P34 Event Ryukoku Museum

夢でつながる教える物語

岩田 朋子 龍谷ミュージアム 学芸員

08 P36 Connect, Unlimited

龍谷大学をつなぐ対談

廃棄する「摘果りんご」を焼き菓みに
青森と京都をつないだ“アップル”リサイクル

青森県弘前市農林部長 経営学部

澁谷 明伸 さん × 今村 朱里 さん

09 P40 My Campus

マイキャンパス

10 P42 News & Topics

最新情報

11 P48 Book Café

新刊紹介

01

Feature Article 巻頭特集 学長対談

上智大学外国語学部教授 小川 公代 × 龍谷大学学長 安藤 徹



「ケア」が紡ぐ人と未来



小川 公代

1972年和歌山県生まれ。上智大学外国語学部教授。ケンブリッジ大学政治社会学部卒業。グラスゴー大学博士課程修了。専門はロマン主義文学、および医学史。著書に『ケアの倫理とエンパワメント』『ケアする惑星』『翔ぶ女たち』（講談社）、『世界文学をケアで読み解く』（朝日新聞出版）など。文芸誌『群像』（講談社）に「ジャッジメンタルな時代—ネガティブ・ケイパビリティ考—」を連載中。

※1ネガティブ・ケイパビリティ イギリスの詩人、ジョン・キーツの言葉。性急に答えを出さずに、不可解さや不確かさ、未知の状況に耐えて考え続ける力。

今年の京都賞を受賞した、アメリカの心理学者キャロル・ギリガン氏が提唱する「ケアの倫理」を安藤学長と同じ文学研究者の立場から研究する小川教授。学長の専門『源氏物語』にも造詣が深く、二人は話が尽きなかった。

安藤:まず、小川先生が研究されている「ケアの倫理」とは何か、お聞かせください。

小川:近代社会の培ってきた「正義の倫理」への対抗原理が「ケアの倫理」です。「正義の倫理」では普遍的な原則や権利、法律、公正さが重視されます。しかし、それは強者の正義ではないか。弱者を取りこぼしていないか。ギリガンは弱者の声に耳を傾け、応えていくケア実践を評価し、他者のニーズや苦しみに共感するような関係性こそが人間や社会の成熟のために重要だと唱えています。

安藤:コロナ禍は、従来の常識が通用せず、正解のない課題に向き合い続けるような経験でした。大学でも、教育や学生支援のあり方などを見つめ直す機会になりました。そうした緊急事態のなかで尽力するエッセンシャルワーカー、つまりケアをする人たちの存在と役割の大きさも再認識されたことがきっかけで、ケアやネガティブ・ケイパビリティ^{※1}が注目されるようになったのかかもしれません。

小川:ケアというと、家事や育児、介護などを指し、女性の労働との概念が定着しています。しかし、コロナ禍によって、エッセンシャルワーカーやシングルマザーの負担が可視化され、女性に集中しがちなケアを社会全体に分散させることも重要だというギリガンの指摘がよりクローズアップされたのだと思います。

安藤:ギリガンや小川先生の「女性の自立も

大切だが、目の前にケアを必要としている人がいたら、そのニーズに応答することが何よりも大切」との考えには、深く共感します。

小川:自立かケアか。二元論と、一択を正当化する構造は近代的な「正義の倫理」に起因しているのではないのでしょうか。女性だけでなく、貧困、ジェンダーといった周縁化された他者の痛み、そして自己の弱みも受け止めながら、開かれた関係性を築き、ともに支え合っていく「相互依存」がケアなんです。

安藤:小川先生は、他者、自己への理解を専門である文学を手がかりに深めていらっしゃいます。

小川:ケアでは、特に他者へ向けた想像力が求められますが、小説を読むと、物語のなかで他者の視点に入り込み、自分とは違う価値観や痛みを追体験できます。こうした、今まで考えもしなかったようなことが自分の体のなかに染み込んでくる感覚を味わうことは、小説にしかできないのではないのでしょうか。

安藤:確かにそうですね。では、ケアと宗教の関係については、どのようにお考えですか。

小川:ケアと宗教は密接な関係にあると思います。上智大学はキリスト教系の大学であり、私の専門のイギリス文学にはキリスト教の教えや神に救いを求める要素で構成された作品が多く、それが読む人々の心の支えになっています。日本では仏教がそれにあたります。仏教の要素を含み持つ文学がスピリチュアルペイン(心の痛み)を和らげたり、あるいは龍谷大学が行動哲学として提唱されている「自省利他」を相互依存の関係性に活かしたりと、ケアに結びつく役割を果たすはずですよ。



※2 雲居の雁(くもいのかり) 光源氏の正妻・葵の上の兄弟である頭中将の娘。光源氏の嫡男で、彼女のいとこにあたる夕霧との幼恋を成就させて結婚し、多くの子を産み育てる。

安藤 徹

1968年岐阜県生まれ。名古屋大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程修了。専門は日本古典文学、特に『源氏物語』をはじめとする平安朝文学。著書に『源氏物語と物語社会』(森話社)など。2000年に龍谷大学文学部に着任。2017年より4年間文学部長を務める。その後、副学長・龍谷ミュージアム館長を経て、2025年4月に第20代学長に就任。

安藤: コロナ禍のさなか「人間のDNAの多くが由来し、体内にも多数棲息するウイルスは外敵ではなく、利他的な存在とさえ言えるもので、共生・共存が必要だ」との主張を目にして腑に落ちるものがありました。小川先生はケアの射程範囲をどう想定されていますか。

小川: ギリガンは、人間だけでなく惑星全体の生命にまでケアの視野を広げています。人間は存在する限り地球に住み続けると考えていますが、果たしてそうでしょうか。環境問題は人間の傲慢さが招いたもので、このままでは他の惑星への移住もなきにしもあらず。環境保全も含めたSDGsの取り組みも盛んですが、人間中心主義な発想ではなく、惑星全体の持続可能性を考える必要があります。人間は約40兆個の細胞からできていることを考えると、安藤学長がおっしゃったウイルスも私たちと同じ生命体です。ケアにおいては、いかなる小さな生命の声も聞くことが不可欠です。

安藤: ご著書にある「惑星的」な視座ですね。そうした視野や思考を養うために、大学はどうあるべきか。本学の長期計画「龍谷大学基本構想400」では、「まごころ～Magokoro～」ある市民を育むことを将来ビジョンとして掲げています。「まごころ」とは一人で完結するものではなく、他者に開かれ、他者との関係のなかで、他者に向かって他者のために自らを突き動かす心です。また、進行中の第2期中期計画には「サステナビリティへの『旅』—変革の加速へ—」という副題を付けています。この「旅」には、学生が見慣れた世界の外に出て新たな視座を獲得し、多様な共創的体験をしていくイメージも重ねています。

小川: ケアにおいても他者を思う「まごころ」は大変重要で、それを育むうえで教養が大切

になります。文学を通じて他者の声を浸透させることで自己を多孔的にしていくという、私も心がけている実践は、まさに教養を高めることなんです。「旅」も大事ですね。自分の周辺事象だけ学んでも専門性は深まらないことを、私はイギリス留学で痛感しました。外での学びや出会いでは、理解不能なことや越えられない壁が立ちただけですが「まごころ」と教養、そしてネガティブ・ケイパビリティがあれば、他者や異なる文化をスムーズに受け入れられるはずです。

安藤: すぐに答えを出さなくてもいいんですね。

小川: そうです。私は『源氏物語』の登場人物のなかで雲居の雁^{※2}が好きです。彼女は悩んだり、苛立ったり、とても人間らしいうえに、事あるごとにネガティブ・ケイパビリティを発揮するからです。雲居の雁のように迷っても構わない。どこか宙づりのような状態でも、いつかは理解できるようになりたいという野心を抱き続けてほしいと両大学の学生に伝えたいです。哲学者の鶴見俊輔は、大学時代に聞いた数学者・ホワイットヘッドの「Exactness is fake (正確さは偽りである)」という言葉の意味を40年間も問い続けたそうですよ。

安藤: 最後に鶴見俊輔の名が出てくるとは。じつは本年度の「学生手帳」に私が記した言葉が、鶴見の「まなびほぐす」なんです。彼はヘレン・ケラーが話した「unlearn (アンラーン)」という言葉に、型通りに編んだセーターをほどこいて元の毛糸に戻し、自分の体に合わせて編み直すようなイメージを持ち、「まなびほぐす」と訳しました。学んではほぐす、その繰り返しによって自らの血となり肉となったものが、本物の教養なのでしょう。学生生活はもちろん、ケアにおいても、この「まなびほぐし」を大切にしてほしいと思います。



新たなキャンパスから生まれる 新たな龍谷大学

龍谷大学は、長期計画「龍谷大学基本構想400」の取り組みとして、社会学部を瀬田キャンパスから深草キャンパスに移転し、2025年4月から深草キャンパスを社会科学の集積拠点として位置づけ、それにともなう大規模施設整備を進めてきました。2025年3月に南北エリアの3つの新棟と「結連橋（ゆいれんきょう）」が竣工、7月に最後の1棟である西エリアの「朋友館（ほうゆうかん）」が完成。7月24日に竣工式が挙行され、深草キャンパス全体のゾーニング整備が全て完了しました。

これまで、一般道路で隔てられていた北エリアと南エリアは上空通路「結連橋」によって一体化し、教育・研究の拠点となります。北エリアに新設された「灯炬館（とうこかん）」は2号館と接続されており、キャンパス広場から直接上階へ移動できます。

灯炬館1階にある「る」の森は、学生が自由に集い、議論し、新たな取り組みを始める場所となることを願って作られた“自由な空間”です。室内全体に観葉植物を配置し、造作家具や天井の素材に積極的に“木”を採用しています。また、瀬田キャンパスに隣接する「龍谷の森」の間伐材を余すことなく利活用しま



西エリア「朋友館（ほうゆうかん）」

した。経年変化を楽しめる丸太椅子や、枝葉を蒸留し、抽出した精油と芳香蒸留水から作ったヒノキミストやアロマオイルを楽しめる「aroma bar」を設置するなど、自然の豊かさを五感で感じることができます。製作時に生じたおがくずも、廃棄せずに消臭・除湿剤として「だれでもトイレ」内で有効活用しています。

南エリアの学習の拠点となる「慧光館(えこうかん)」には学内外の講演会に対応できる調整室・同時通訳ブースを設けた教室や創業支援ブース、ユナスソーシャルビジネスリサーチセンターなど社会連携を図る環境が整っています。隣接する「聞思館(もんしかん)」には、成就館から続く緑化壁の内側にバスロータリーが整備され、「結連橋」から繋がる2階には体育館アリーナへのアプローチと学内外から利用可能なフードコートが設けられました。上層部は木材を使用した講義室・研究室フロアとなっています。

学生の課外活動拠点となる西エリアの「朋友館」は、防音練習室、工作室、部室(BOX)に加え、テラスやラウンジなどの交流空間を設置。屋外トレーニング室やランニングスロープ、既存の紫光館との一体利用が可能な外周テラスなど、多様なニーズに対応しています。また、「GOLD'S GYM」の協力により、一般学生や教職員を含むすべての大学関係者が利用可能なフィットネスジムを整備しました。



北エリア「灯炬館(とうこかん)」



灯炬館(とうこかん)1階「る」の森



南北エリアを繋ぐ上空通路「結連橋(ゆいれんきょう)」



南エリア「慧光館(えこうかん)」



南エリア「聞思館(もんしかん)」

環境サステナビリティ学部・情報学部

2027年4月 瀬田キャンパスに開設予定 (仮称・設置構想中)

「環境サステナビリティ学部(仮称)」

実践的に課題解決に向き合える次世代の環境人材を育成

学びの特色

環境とテクノロジー、経済・経営にまたがる学びを通じて未来社会を創造する人材を養成します。また、主体的な学びやチームで協働する姿勢などを涵養するとともに、リアルな現場での体験や経験を通して知識・技能の定着を図ることを目的とする体験・共創型のPBL科目「クエスト科目群(仮称)」を配置し、実践的な学びを提供します。

専門性を深める5つの「専門教育プログラム」

- ・地域デザインプログラム
- ・ネイチャーポジティブ経営プログラム
- ・生物多様性回復プログラム
- ・資源循環利用プログラム
- ・持続的水資源管理プログラム

学部	環境サステナビリティ学部
学科	環境サステナビリティ学科
学位	学士(環境サステナビリティ学)
入学定員	130名
3年次編入学定員	2名
収容定員	524名

環境サステナビリティ学部特設サイト
<https://www.ryukoku.ac.jp/newf2/>



「情報学部(仮称)」

情報と社会課題をかけ合わせた学びで、「実践力」「応用力」を有する情報人材を育成

学びの特色

オープンデータや蓄積された膨大なデータを基に、データ思考をベースとした課題発見力や課題解決力を修得します。また、理系・文系を問わず人工知能(AI)を駆使して、人間の行動に関するデータ等を解析することで、人間の行動や嗜好を予測するモデルを構築し、新たなサービスの創出につなげるための知識や技術を体系的に学びます。

多様な学びを体現する3専攻分野

- ・情報メディア専攻
- ・知能情報システム専攻
- ・実践データサイエンス専攻

3つの専攻を横断する学びを、「総合実習」等で実現します。

学部	情報学部
学科	情報学科
学位	学士(情報学)
入学定員	130名
3年次編入学定員	3名
収容定員	526名

情報学部特設サイト
<https://www.ryukoku.ac.jp/newf1/>



2025年9月、深草キャンパスに 学びの総合窓口「Campus HUB」を開設



2025年9月1日、龍谷大学深草キャンパスに「Campus HUB」を開設しました。Campus HUBは、これまでの各学部教務課の窓口を1つの拠点に集約し、学生が所属する学部に関わらず、教学全般に関する問い合わせや手続きができる「学びの総合窓口」です。

コロナ禍を経て、DX化などの技術革新が進み、学生サービスの提供も多様化しているなかで、均質的でより利便性の高い教学サービスの提供が求められています。学生窓口を一元化することで、学生の声をより幅広く集約し、学生支援や教学サービスに反映することにより、学修者本位の教育への転換をめざします。

施設内は無印良品を展開する「株式会社良品計画」が家具や内装のデザインを監修。深草キャンパス施設整備の「深草を森にする」というコンセプトと調和し、天然木などの自然素材を生かしたシンプルで明るい空間にオフィスグリーンを多く配置することで、訪れる学生や働く教職員にとって居心地の良い空間を実現しました。また、ミーティングスペースやカフェワークスペースを設置。職員間のコミュニケーションの活性化を促し、横断型業務やプロジェクト型業務など、業務内容に

応じた柔軟な働き方を可能にするオフィス環境が整いました。

Campus HUBは、学生の利便性を高め、教学サービスを充実させるとともに、職員の働き方改革を推進し、創造的な事業を生み出す新たな教学支援の拠点＜HUB＞として展開していきます。

Campus HUBの主なサービス

- ・履修、授業に関すること
- ・成績に関すること
- ・定期試験、追試験に関すること
- ・学籍異動（休学、退学等）に関すること
- ・学籍情報（住所、保証人情報等の大学へ登録している個人情報）に関すること
- ・学生証、学生証裏面シール（通学経路）に関すること
- ・証明書に関すること
- ・単位互換に関すること

Campus HUB特設サイト
<https://www.ryukoku.ac.jp/campushub/>



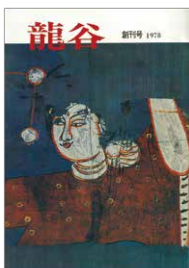
03 100 Issues, Ryukoku's Story

創刊100号記念 広報誌「龍谷」がつむぐ龍谷大学の歩み

1978年の創刊から47年。広報誌「龍谷」が100号を迎えました。

創刊号から表紙が変更された号を厳選してご紹介。広報誌「龍谷」から龍谷大学の歩みを振り返ります。

創刊号 1978年

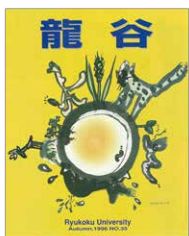


大谷探検隊がアスターナ古墳群から発見した「伏羲女媧図（ふっきじょかず）」が表紙。創立340周年を迎えるにあたり、深草学舎にシンボルとなる礼拝堂（現顕真館）を建立することが決定。「深草学舎礼拝堂建立趣意書」を発表し、協力・援助を呼びかけた。

深草学舎礼拝堂建立趣意書



35号 1996年

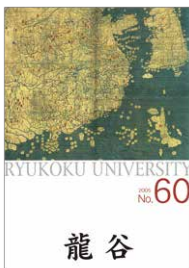


本学法学部に在籍された「WAKKUN（わっくん）」の愛称で知られる画家の涌嶋 克己さんのイラストが表紙。イラストレーター、絵本作家として現在も活躍されている。

1996年6月、深草キャンパスと南大日グラウンドを結ぶ課外活動バスとして本学のロゴ入りのバスが登場。当時のスクールカラーで彩られたデザインで人々の目を惹きつけていた。



60号 2005年



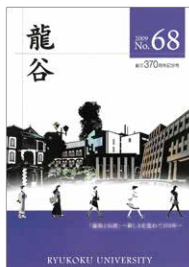
現存最古の世界地図の一つである『混一疆理歴代国都之図』が表紙。

2002年度から検討してきた深草キャンパスの改修工事が2005年8月から開始。

ステージを設置し、芝生エリアを広げることで明るく緑あふれるキャンパスを創造。太陽光発電の採用など環境への配慮を行い、キャンパス内のバリアフリー化を実現した。



68号 2009年



表紙のデザインを一新。創立370周年記念事業のデザインとして、webや大学の紙袋などにも本デザインを使用。広報誌「龍谷」では「学舎の370年をたどる」という企画を展開。龍谷大学がこの地に至るまでに経験してきたさまざまな事件や災害など、1639年の学寮創建から370年にわたる学舎の歴史を振り返った。



74号 2012年



2010年度から10年間の改革指針として策定した「第5次長期計画」の施策の一つとして、2011年からブランディング活動に着手。

学生の成長を主軸に置いたブランドコンセプトのもと、新しいロゴマークとスローガン「You, Unlimited」を導入し、広報誌「龍谷」も74号からブランディング仕様のデザインに移行。

これまでのイラストから一新、表紙に学生の写真を掲載し、龍谷大学で学ぶ学生の姿をより印象づける広報誌へとリニューアルした。

また、2011年に開設した政策学部や、2015年4月の国際文化学部の深草移転を見据えた全学的なキャンパス整備の一環として新棟（22号館）が完成した。

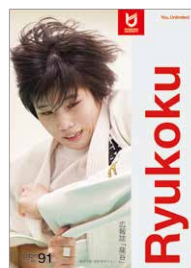
81号 2016年



情報発信のデジタル化の流れを受け、81号から冊子版とあわせてデジタル版での配信を開始。冊子版は誌面サイズをA4サイズからA5サイズに変更。

また、2020年度にブランディングのアップデートを行い、グローバルな視点や国内外での存在感を示すため、ロゴマークを英文表記に変更。広報誌「龍谷」も2021年度から新たなブランディングデザインに移行し、本学だからこそその教育・研究・社会貢献活動や学生の諸活動、本学が推進する「仏教SDGs」に資する取り組み等を紹介する広報誌へと内容を一新した。

91号 2021年



Message

広報誌「龍谷」が創刊された1978年、当時私は学生部にいました。学生の課外活動の写真を撮影することが多かったため、撮影担当の広報委員として声がかかり、広報誌「龍谷」の制作に携わるようになりました。創刊号から10号までの約5年間、多くの写真を撮影しました。10号に掲載されている「文学散策 源氏物語点描」は急逝された故中川浩文学部教授の遺稿となりました。そちらにも私が撮影した上賀茂神社や嵯峨野、賀茂川の写真を添えさせていただいており、当時の広報誌を見返すと懐かしく、涙が出そうになります。あれから40年以上が経ちましたが、今でも広報誌「龍谷」が在学生や保護者の方、卒業生など多くの方に読まれていること、非常に感慨深く感じています。

広報誌「龍谷」創刊号広報委員 西山 信行



広報誌「龍谷」10号掲載
嵯峨野(撮影：西山 信行)



発と提供



たんばく質摂取キッチンカー

- ◆日本列島は、キッチンカーでエスコーンフィールドで無農薬しているシャワエリセントッグを販売中
- ◆外食や食料品を兼ねたキッチンカーを運営
- ◆手軽にたんばく質摂取可能な食事を提供
- ◆まずは大人数
- ◆知食

04 People, Unlimited

農学部食料農業システム学科4年生
比叡山高等学校出身
吉本 莉香 さん



体を支えるたんぱく質のいっそうの摂取を 全国規模のフォーラムで食育普及の企画を提案

農林水産省主催「全国食育推進ネットワーク・食育推進フォーラム2025」で実施された産学連携ワークショップ「みらいプレスで見えてくる!わたしたちの食育」に、食料農業システム学科の吉本莉香さんが参加。学生と企業による5チームのうちの1つ「チーム日本ハム」のメンバーとしてワークショップに取り組んだ。

食育とは、食に関する知識を深め、健全な食生活を実践する力を養うこと。昨今は若い世代から高齢者に至る大人の食育が重視されている。このフォーラムでは、企業と全国から募った大学生による、若い世代への食育の普及や食生活の改善に繋がるアイデアの提案がおこなわれる。企業より事業内容や食育に対する考え方が共有され、参加学生はランダムにチーム分けされた。「私は日本ハムのチームに決まり、社員の方にサポートいただきながら、5大学から集まった6人とアイデアの創出に取り組みました」

日本ハムは、ハムやソーセージをはじめとするたんぱく質豊富な食品を取り扱い「たんぱく質を、もっと自由に。」というビジョンを掲げていることから、メンバーはたんぱく質に着目する。「生きるために欠かせない栄養素であるにもかかわらず、国が示す食育推進計画や栄養摂取目標には、たんぱく質の項目が

ないのです」と驚いた吉本さんは、メンバーと会議を重ね、たんぱく質を身近な存在にしようとしてスマートフォンを活用したアプリ開発を立案。食事の画像からたんぱく質の摂取量や不足量を計測する機能、日本ハム商品を使った「たんぱく質の摂れるお弁当」の注文機能、さらに日本ハム商品と交換可能なポイント付与制度などのアイデアを盛り込んだ。

東京で開かれたフォーラムでは、吉本さんと2人のメンバーが企画を発表。会場とオンラインの聴衆が選ぶ「参加者特別賞」に輝いた。「半年間練り上げた内容と6人の思いが届いた結果であり、社員の方が喜んでくださったことも、うれしかったです」。この受賞をきっかけに、徳島県で開催された「第20回食育推進全国大会in TOKUSHIMA」にブースを出展。より多くの企業と一般の方にたんぱく質摂取の大切さを伝えることができた。

学科では食とSDGsの学びを深めるとともに、サブスクリプションを活用した子ども食堂などの食事提供事業者の支援・維持が卒業研究のテーマ。「日本ハムのSDGsの取組を知れて、研究内容が深まりそうです。また、私自身、たんぱく質不足だと気づいたことで、現在は意識して摂取するようにしています」と、アプリの実現を誰よりも心待ちにしている。



龍谷大学初の快挙。高い自己効力感で 超難関の海外大学博士課程に特待生として進学

世界の大学ランキングで常に上位に入るカナダのブリティッシュ・コロンビア大学(以下UBC)。世界中から優秀な学生が集まるこの大学でも超難関の博士課程に特待生として進学が決まった国際学研究科修士課程特別専攻生の檜雄詞さん。龍谷大学初、UBCでも特待生の狭き門を突破したのは快挙だという。

成績や受験のために点数だけを求め、型通りの正答しか認められないことに疑問を感じ「勉強は嫌いでした」という檜さん。ところが、高校時代、バックパッカーとして世界を渡り歩いた経験を持つ英語教員が言った「英語は単なるコミュニケーションのツール」という言葉に感銘を受けた。自分も海外に行きたいと英語を猛勉強。留学が必修の龍谷大学国際学部グローバルスタディーズ学科に進学した。入学後も単語帳がボロボロになるほど英語力を鍛え、満を持して留学へという時にコロナ禍に。オンライン留学を余儀なくされるなか「留年してでも現地に行く」と、檜さんは渡航可能になるまで待ち、4年生でついに念願の留学を果たした。

留学先のアメリカのカリフォルニア大学バークレー校では正規科目も受講。鍛えた英語が思うように通じず、挫折感を味わったものの、意欲は決して低下しなかった。この経験

から檜さんは学習のモチベーションや目標達成に向けた自信を指す「自己効力感」という概念に着目。自己効力感が英語学習の動機づけや意欲向上にどのように作用するのか、研究することに決めた。ただ、英語学習者の自己を深掘りした先行研究が少なかったため、アンケートを用いてデータを収集・分析する量的調査方法を駆使。「学部の卒業論文では国際学部1年生の自己と英語学習のモチベーション、大学院の修士論文では中学校の英語教員の自己効力感を調査。結果、英語教育全般における自己の重要性を明らかにしました」

言語研究で世界をリードするUBCでは、異国で英語学習に取り組む日本人留学生の自己効力感を研究する。「約5年と長期になりますが、楽しみで仕方ありません。私はとにかく自己効力感が高い。その源泉は英語学習の成果に加え、入学当初に『答えは一つではなく、正解となり得る可能性を探ることが真の学びである』と教えてもらい、UBCへの挑戦も背中を押してくれた龍谷大学の先生方です」。博士課程修了の暁には、恩師たちと同じく、日本人の英語学習における自己効力感の向上に貢献したいと、檜さんは自信に満ちた表情でカナダに渡った。





「龍谷の森」でマツタケの生育・収穫を 大学の重要プロジェクトとしての継続も目標

本学の瀬田キャンパスに隣接する「龍谷の森」で、希少なマツタケを育てるプロジェクトが始まった。発起人の安田心さんは、様々な生物が絶滅の危機に瀕していることから環境課題に関心を持ち、環境生態工学課程に入学。3年次の約3ヶ月間、学生の自由で自発的な発想で研究・調査ができる先端理工学部の科目「プロジェクトリサーチ」に取り組むことを入学直後から決めていた。「龍谷の森」での環境実習で、宮浦富保教授から里山保全には『管理』が不可欠であり、絶滅危惧種となっているマツタケも、人の手による環境整備が必要であると学び『マツタケができる環境づくり』をプロジェクトのテーマにしました

安田さんを含む7人のメンバーはマツタケについて調査。すると、環境課題の複合的な原因が見えてきた。「マツタケは菌根菌という菌からなるキノコで、アカマツの木と共生・生育します。ともに日当たりがよく、乾燥した環境を好むので、枯れ木や落ち葉の除去や、アカマツの適度な伐採といった里山の管理が必要です。かつて里山は食料や薪、炭といった燃料を得るために人々が常に手入れしていたことから、アカマツもマツタケもよく育っていました。ところが、エネルギー源がガスや電気になったことで里山は放置状態に。都市開

発による里山の消失もあり、マツタケが採れなくなってしまったのです」

京都のマツタケ保全団体にも話を聞いた安田さんたちは「龍谷の森」でアカマツの自生が見られたエリアを整備。「マツタケができる環境が整えば、人の手で自然を管理することの大切さが見えてきて、生物多様性の保全にもつながると思います」と安田さん。「『龍谷の森』里山保全の会」やニホンミツバチ研究会「Bee わーこ!」といった他の団体や学生プロジェクトとも連携して管理をおこない「龍谷の森」の好循環もめざす。

「マツタケの生育や収穫が叶うには約20年かかるので、龍谷大学全体の取り組みとして、周知と継続が不可欠です。オープンキャンパスや龍谷祭などでの整備体験イベントも企画しています」と広報活動にも注力。プロジェクトによって自らが進む道も見えてきた。「里山を通じた持続可能な社会のあり方を今後の研究テーマにしたいと考えています。人々の生活や社会を発展させつつ、自然と密に関わり、共生していくことが重要だからです。将来的には里山の大切さを多くの人に知ってもらう場を提供するスタートアップも視野に入れています」と語る安田さんは、今日も仲間たちと「龍谷の森」で汗を流している。



「龍谷の森」でアカマツに日当たりが良くなるように他の木を伐採する安田さん

05

Education, Unlimited

経営学部
スポーツサイエンスコース運営委員長
松永 敬子 教授



学部共通コースWebサイト
<https://www.ryukoku.ac.jp/faculty/course/>



"学部を越えてスポーツ科学を学ぶ" 日本初のコース開設から30年

異なる学部の学生がともにスポーツを専攻

龍谷大学学部共通コースの1つ、スポーツサイエンスコースは2024年に開設30周年を迎えた。スポーツ・健康の専門領域とは異なる、経済学部・経営学部・法学部の学生がスポーツ科学を学ぶ教育課程は日本初。「2011年に政策学部、2025年からは社会学部が加わり、さらに多くの学問領域が融合しています。創設時の教職員の皆さまに敬意を表します」と、コース運営委員長の松永敬子教授は語る。

カリキュラムは、近代スポーツ史や現代スポーツ論、スポーツ心理学、スポーツマネジメント論などを学ぶ人文・社会科学系科目。身体運動の生理学や身体運動の機能解剖学、身体運動の制御と学習、スポーツトレーニング論などを学ぶ自然科学系科目。さらにその専門分野を深く学ぶ特別演習（ゼミ）と実習で構成。また、各学部履修推奨科目を設け、学部で履修した基礎知識をスポーツ分野において探究・実践するとともに、自らの関心や目標に応じて幅広いスポーツ科学系科目を選択・学修できる。「スポーツは、健康増進や日常の楽しみ、競技力向上のための『するスポーツ』、観戦や応援などの『観るスポーツ』といった特性があり、人々の健康や幸福度の

向上、社会・経済・地域の活性化を図るうえでの役割・効果は多大です。そのため、競技経験や競技力を問わず、スポーツ科学の基礎を学び、スポーツを多面的な視点から『考える』『支える』人材が不可欠。この重要性にいち早く着目し、学際的、専門的な学びを通じて多様な素養を獲得し実践する人材、私たちが称す『スポーツサイエンティスト』の育成・輩出がコース設置の目的であり、使命です」

この30年で進展したスポーツ科学の研究・技術、スポーツの形態や価値、課題の多様化にも対応。例えば、松永教授のゼミでは地域スポーツのマネジメントについて学び、問題がとくに深刻化している過疎地域の運動部活動にICT（AIカメラ）を活用するアイデアを、2022年度日本スポーツ産業学会第31回大会アイディアコンペにて企画提案。「スポーツ庁長官賞（最優秀賞）」を受賞し、実証実験を行うなど、過疎の村での活動を継続している。また、コースではトレーニング指導者やアシスタントマネジャーをはじめとする各種受験資格を取得可能。数多くのスポーツ関連企業や団体との連携も特長で、スポーツキャリア実習やゼミ活動を通じて経験を積んだ多くの卒業生がスポーツの現場で活躍していることは、30年にわたる実績と信頼の証と言えるだろう。

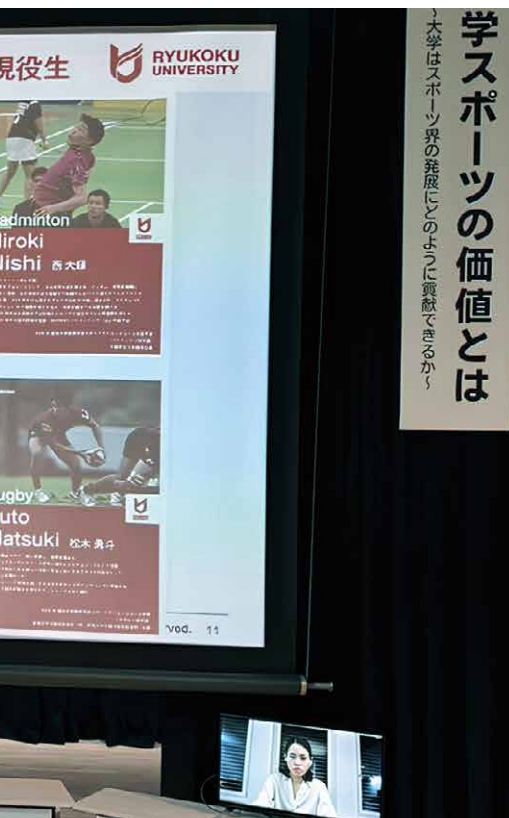


グローバル人材やオリンピックも輩出

2025年2月には、スポーツサイエンスコース等の開設30周年を記念して「大学スポーツの価値とは～大学はスポーツ界の発展にどのように貢献できるか～」と題したシンポジウムを開催し、座談会には卒業生3人が登壇。その1人である山崎萌さんは政策学部で地域活性化やまちづくりについて学び、大好きなサッカーに関わる仕事がしたいという中学生からの夢を叶えるため、このコースを選択。夢の実現には、学部とコースでの学びに加えて、語学力も必要と、学術文化局ESSに所属。卒業研究のテーマも「クラブの育成・普及関連であった。」クラブやスペインでの活動を経て

(株)名古屋グランパスエイトへの採用を叶えた。また、本学留学プログラムを活用して海外でも学んだ経済学部卒の工藤美咲さんは、スイス・ローザンヌにある世界野球ソフトボール連盟(WBSC)のProject Managerとしてグローバルに活躍している。「各学部での学びをベースにスポーツの知見を深めたい学生がこのコースで目標を定め、意欲的に学修したり、競技力向上に繋げて挑戦したりしています。保健体育教員志望ではない高校生が進学することも多く、卒業生の話からもこのコースの存在意義を感じています」

後半の講演・座談会では「学生スポーツの価値」をテーマに開催。コースの卒業生・現役生にはロンドンオリンピック陸上競技競歩代



表・瀧瀬真寿美選手(経済学部卒)、パリオリンピック女子バレーボール代表・福留慧美選手(経済学部卒)といったオリンピックをはじめ、国内外の第一線で活躍する選手や監督・コーチ・トレーナーが多数。現役中はもちろん、引退後のセカンドキャリアにもコースでの学びが活かされている。スポーツサイエンスコースと同時に開設された学生部所管の「トレーニング室」30周年、「スポーツ・文化活動強化センター」10周年を機に三者の連携をさらに強化。「各教員の専門や研究を活用しつつ、新たな連携事業を展開していきます」と松永教授。スポーツサイエンスコースが人々と社会とスポーツの未来を切り開いていく。



松永 敬子

大阪体育大学大学院体育学研究科修了。専門分野はスポーツマネジメント。日本スポーツマネジメント学会理事、日本体育・スポーツ経営学会理事、スポーツ庁スポーツ審議会健康スポーツ部会委員など。2008年龍谷大学経営学部に着任。2016年ボランティア・NPO活動センター長、2017年学生部長(スポーツサイエンスコーススポーツ・文化活動強化センター長)、2019年キャリアセンター長、2023年学長補佐などを歴任。

05 Education, Unlimited

心理学部

内田 利広 教授

心理学部

小田 愛翔 さん





学生と生徒が心で繋がる 学校現場での心理的支援実習がスタート

コミュニケーションや繋がり体験が目的

2023年に開設した龍谷大学心理学部。心理的に問題を抱えている人への支援はもちろん、心身ともに良好な人の円満な人間関係構築などにも心理学の専門性を活用するために、コミュニケーション・スキルの養成に力点を置いた教育を展開していることが特長。人と人の心が通い合う繋がりを育み、社会の発展に貢献する人材の育成をめざす。

学部開設3年目となる2025年4月からは、より専門的かつ本格的な学外実習が始まった。社会で心理的支援を実践する場合は医療、福祉、学校、企業と多様で、職種も国家資格の公認心理師、民間資格の臨床心理士を前提としたスクールカウンセラーや医療心理職など様々。学生はめざす資格や方向に応じた現場にて、座学で学んだ知識を実践することが求められる。その一つが「思春期の子ども理解と支援実習」である。担当教員を務める心理学部の内田利広教授は、成長段階の児童や、思春期、反抗期といった多感な時期にいる子どもの不登校やいじめなど教育に関する問題と心理的支援を研究。小・中学校のスクールカウンセラー、京都市をはじめ教育委員会のスーパーバイザーを歴任している。

この支援実習先である京都市立洛風中学校は、文部科学省が推進する「学びの多様化学校」で、不登校の経験を持つ生徒のみが入学し、学校生活と学習の支援のために開校。内田教授も設立や運営などに携わってきた。

「支援実習の最大の目的は、心理的支援が必要な子どもたちと直接ふれあうことです。これに限らず、本学部の専門的な実習は、公認心理師や臨床心理士の資格取得に必要な必須の実習とは異なり、心理的支援の対象者とのコミュニケーションや心の繋がりの経験を積む機会を多く設定していることが独自性といえるのではないのでしょうか」と内田教授は説明する。

洛風中学校での支援実習を受講する学生は、将来、スクールカウンセラーや子どもとの関わりを希望している。その1人である心理学部心理学科の小田愛翔（まなと）さんは内田ゼミの学生でもあり、中学時代、仲間との人間関係の構築が上手くいかない出来事と、その際に十分なサポートを得られなかった経験から、思春期の子どもたちがもっと気軽に相談でき、親身に支えてくれる心理的支援者の重要性を感じて、本学の心理学部に入学。心理学の理論と実践の両面から専門的な学びを深めている。



洛風中学校での実習の様子

手引きなし。学生自らが現場で考えて支援

洛風中学校は年間総授業数が少なく、個々の感性を活かして描く・つくる・歌うなどの自己表現を促す「創造工房」、自己を分析したり、同じ悩みを持つ仲間と交流を深めたりする「ヒューマン・タイム」といった特色あるカリキュラムが設定されている。小田さんたちは週に1回、始業から終業まで支援実習に取り組むのだが、内田教授や洛風中学校の教員からの指示や実施マニュアルは存在しない。学生自身が授業や休み時間の生徒たちを見て、感じて、教室や輪の中に加わり、自主的に学習を手伝ったり、会話をしたりするのだ。「自由な分、難しいですが、その場で考えなが

ら自分なりに実践できることにはやりがいを感じます」と話す小田さんの感想を受けて、内田教授は「心理的支援の方法は一つではなく、正解也没有。とくに多感な時期の子どもは、気分や体調によって昨日までは会話が弾んでいたのに、今日は何も話してくれないことが少なくありません。だからこそ、小田さんたちが挑んでいる“現場で考え、対応する”ことが心理的支援者には不可欠なのです」と強調する。

ある日の支援実習では、小田さんは昼休み中にサッカーをして生徒たちと一緒に汗を流した。「実習の回数を重ねるごとに絆が深まっていると感じますが、内田先生がおっしゃるように、突然様子が変わったり、私の言葉や



対応をはじめ、何かのきっかけでその子がしんどくなる可能性があるので、目配りと気配りを忘れず、適切な距離感で接することを心がけています」と小田さんは話す。

子どもたちの心の問題は一朝一夕には解決できない。「そのため、心理学を学ぶ学生にサポートしてほしいと、学校現場からの要望が高まっています。子どもと年齢が近く、打ち解けやすいのでしょう。また、大学生を見て、自分もこんなふうになりたいと憧れ、学習や学校生活に前向きになる生徒もいます」と語る内田教授。この支援実習は子どもへの相乗効果が期待できる、心の繋がりにもなっていることが小田さんたちと生徒たちの笑顔からも伝わってきた。



内田 利広

九州大学大学院教育学研究科博士後期課程教育心理学専攻修了。公認心理師、臨床心理士の資格を持つ。九州大学心理教育相談室相談員や国立小倉病院精神科臨床心理士など、様々な心理的支援の現場で活躍後、2005年龍谷大学大学院文学研究科非常勤講師着任。2021年龍谷大学文学部臨床心理学科教授、2023年龍谷大学心理学部心理学科教授に就任。日本公認心理師協会会員、日本スクールカウンセラー協会常任理事など学会の要職も歴任。



小田 愛翔

神奈川県出身。心理学部心理学科3年生。中学時代の経験からスクールカウンセラーの存在に関心を持ち、コミュニケーション・スキルの養成を重視する本学の心理学部に惹かれて入学。内田教授のゼミで学び、卒業研究のテーマは「いじめにおける家族関係と影響」。卒業後は、未成年の犯罪や審判において、非行内容や生育環境を調べる家庭裁判所調査官をめざす。

06 Research, Unlimited

先端理工学部 応用化学課程

中 沖 隆 彦 教授





世界初。水に溶けて自然に還る、 花火の玉皮の開発に成功

花火が環境負荷に？化学の力で解決を

夏の夜空を美しく彩る花火。多くの人々に感動を与える一方で、打ち上げ後の残留物が環境課題になっていることを知る人は少ない。そこで、応用化学課程の中沖隆彦教授が産学連携による共同研究で、水に溶ける樹脂を使った花火玉の外殻部分「玉皮(たまかわ)」の開発に成功。特許を出願した。「玉皮」は花火の色や模様になる星という火薬と、高く遠くに飛ばすための割薬という火薬を詰める球状の容器のようなもの。昔は和紙を何重にも貼り合わせて球状にしていたが、昨今はダンボールに用いられるクラフト紙をプレス成形した容器が使われている。しかし、クラフト紙が丈夫さゆえに燃え切らず、その破片が河川や田畑、住宅に落下して残ってしまうのだ。花火製造会社や花火大会主催者は、打ち上げ後、破片回収をおこなうものの、人員と労力は相当。こうした課題を受け、株式会社柿木花火工業(滋賀県長浜市)では早くからエコ花火の製造を開始した。微生物の働きによって水と二酸化炭素に分解される「生分解性樹脂」の玉皮を使用し、破片ゴミの減量、環境負荷の軽減に成功した。しかし、生分解性樹脂は分解に時間を要す。琵琶湖周辺で花火を打

ち上げることが多い同社は琵琶湖に浮かぶ玉皮の破片を目にし、「もっとエコな花火を」との思いを抱き中沖教授との共同研究に至った。

中沖教授の専門は高分子材料解析と環境調和型高分子の創製。環境にやさしい樹脂材料の研究だ。依頼を受けた中沖教授は、破片の解決策として水に溶けて自然に還る「水溶性×生分解性樹脂」という新たな玉皮の開発に着手。「素材には、水溶性ポリビニルアルコール(以下PVA)という水に溶ける樹脂が適していると考え、株式会社クラレ(東京都千代田区)から提供を受けました」

中沖研究室では、まず性質や仕様が異なる複数のPVAのうち、溶解性が高く、コスト面でも優れた1種を選定。次に研究室で取り組むポリビニルアルコール繊維の超高強度化の技術を活かし、球状に成形するためのPVAと添加剤の配合比を検証。玉皮に模した球体を試作して打ち上げ実験し、破片が細かく割れる最適な配合比を導き出した。実際の玉皮を試作したところ「PVAの高い粘性により、成形加工機器に付着してしまうことが判明。剥離剤の添加が必要となり、配合比を再度検証しました」



中沖教授が研究している「水溶性×生分解性樹脂」の玉皮

雨が降れば溶けてなくなり回収も不要

2025年3月、玉皮の成形加工に関する課題をクリアした試作品の花火が、本学・瀬田キャンパスのグラウンドで打ち上げられた。研究室の学生たちは急いで玉皮の落下場所を探索。屋内外の建物の屋根などに落下した破片を特定し、一定期間自然放置して観察した。

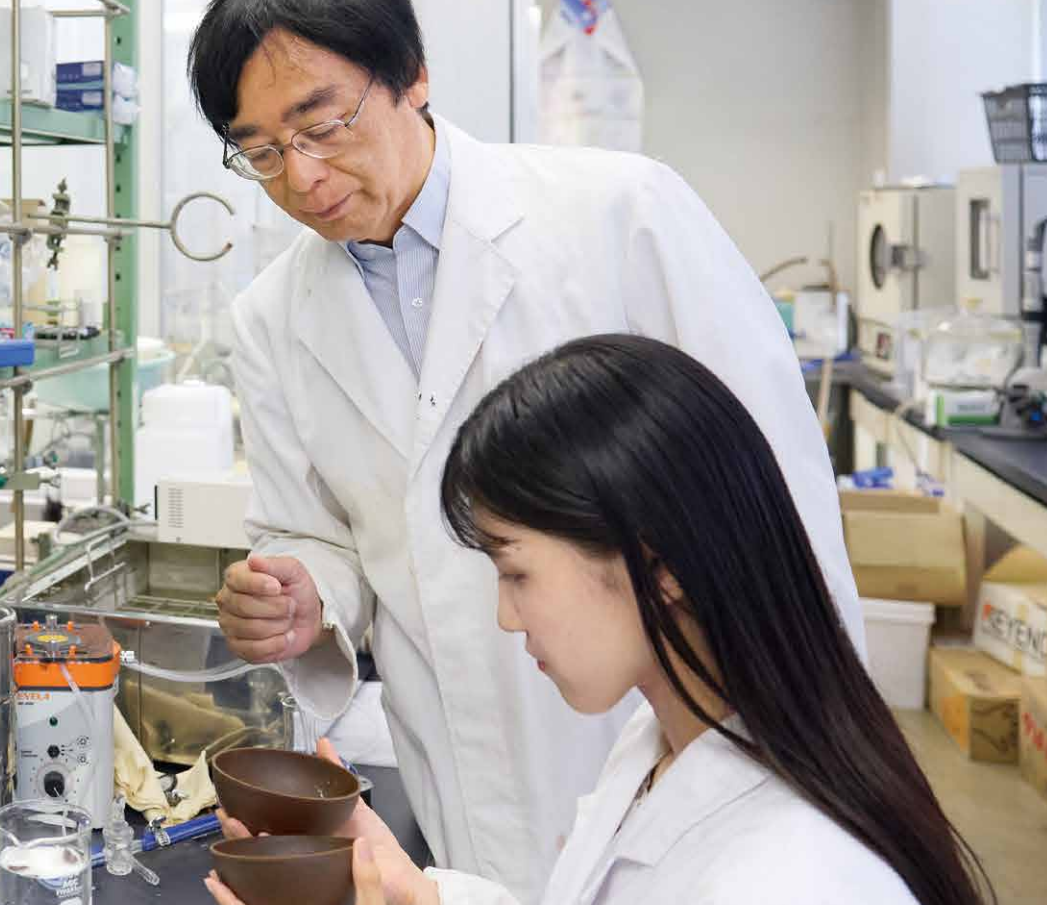
「打ち上げ翌日と4日目に降雨があったのですが、3日目あたりから破片の大半が溶解し、4日目には跡形もなく消失しました」

この結果により、琵琶湖をはじめ海や河川に落下すればすぐに溶解が始まり、田畑や屋根などに落ちて、雨が降れば4日程度、大雨なら1日程度で溶けて消失することが実証

された。破片は微生物によって分解されるので、水質や土壌、植物などへの影響もない。水に溶けて、自然に還る、環境にやさしい玉皮が世界で初めて完成したのだ。

現在、「水溶性×生分解性樹脂」の玉皮を使った花火は株式会社柿木花火工業での製造が進められ、2026年夏の打ち上げを目指している。「よりエコな花火」として、日本はもちろん、世界に普及させていくことを構想しているという。

「私のテーマである、環境にやさしい高分子材料の研究成果が実用化され、世の中の方に喜んでいただけることをうれしく思います」と中沖教授。人々の生活や社会に欠かすことができない樹脂だが、地球環境を守るた



めには、石油由来ではなく、ゼロカーボンやバイオマス、生分解性の樹脂への代替が急務である。

「最近、大手ファストフード店に生分解性樹脂製のストローが導入されましたが、コストをはじめ、より身近な存在になるには、まだ課題があります。とはいえ、循環型材料のニーズも多く、研究の重要性や研究者への期待も高まっています。バイオマス由来の樹脂によるゼロカーボンサイクルを確立するために、学生とともに研究に打ち込んでいきます」と中沖教授。「樹脂を生合成する微生物も研究しており、よく口にする食品から微生物を介して樹脂を生成することも考えています」と教えてくれた。



中沖 隆彦

大阪大学理学部高分子学専攻博士課程(博士・理学)修了。龍谷大学理工学部物質化学科助手、専任講師、助教授を経て、2005年4月龍谷大学理工学部物質化学科教授に就任。2020年4月学部改組により先端理工学部応用化学課程教授に就任。専門は生分解高分子と高分子楮解析。プラスチックフィルム研究会運営委員、高分子学会関西支部常任幹事、固体NMR材料研究会運営委員など学会の役職を歴任。



司法における方言の役割 ～被疑者の権利と人生を守り、冤罪を防ぐ「砦」

真実にも虚偽にもなる方言は諸刃の剣

温かさや懐かしさを感じ、心に深く響く方言。「警察・検察による被疑者の取り調べでは、真実を明らかにする効果がある一方、ことばの凶器や暴力と化し、虚偽自白をさせる恐れのある『諸刃の剣』です」と言う文学部哲学科の札埜和男教授。国語科における法教育の専門家、社会科や公民科でおこなわれる模擬裁判を言語活動として捉え、文学作品をモチーフに登場人物の心情や物語の中の出来事を読み解く「文学模擬裁判」を開発実践。大阪弁を軸に据えた「法廷における方言」というテーマで博士論文をまとめあげ、今は警察・検察の取り調べにおける方言と冤罪の研究にも取り組んでいる。きっかけは、親交のある山田悦子氏のことばだった。山田氏は事件発生から25年間にわたる闘いの末、無罪判決を勝ち取った甲山事件の冤罪被害者である。「取り調べの最初はよそいきのことば、親しくなると関西弁。方言でのやりとりが虚偽自白を生むことになった」。事実を突き止める場で、方言が「求める答え」を強引に引き出す手段になった実態を知り、札埜教授は冤罪被害者、元警察官・検察官、弁護士たちへの聞き取り調査を開始。その一例が、大阪府泉大津

市で発生した強盗事件の冤罪被害者である土井佑輔氏のケースだ。2人の刑事が軟と硬の役割を持っていたという。まず軟の刑事が「恋人もおって、夢もあるやろ？で、どや？」と、罪を認めるようにやんわり語りかける。身に覚えのない土井氏が黙秘を続けていると、硬の刑事が「何が否認じゃ」と暴言を浴びせ、自白を強要した。「被疑者との距離感を縮めて、ある種の信頼関係を築いたり、懐柔と恫喝を繰り返したりと、取り調べる側は方言を戦略として活用するのでしょう。元検察官からは『被疑者の口から方言が出てくると、しめたと思った。自発的にしゃべっていることを担保でき、自白の信憑性が増す』とも聞きました。犯罪捜査規範にもあります」

方言が冤罪を生む一因として、札埜教授は取り調べる側の圧倒的権力を指摘する。「被疑者の行く末は取り調べる側に握られてしまっています。非日常的な状況下で、たった一人で権力と闘わなければならない。一方、権力者側にとって取り調べは日常であり、方言をはじめ自分たちのことばで自由にふるまえ、自分たちのシナリオ通りに話をさせる心理状態と言語空間を築いていく。被疑者は緊張感や圧迫感から心身ともに疲弊し、冷静な判断力も失われていきます」



社会と自己の在り方を問うメディア『BEING』札幌教授監修記事
<https://www.ryukoku.ac.jp/being/04/>



本学至心館で実施された高校生による「文学模擬裁判」の様子。左より検察側：森村学園（神奈川）、弁護側：創志学園（岡山）

方言で自由に話す権利「方言権」

取り調べにおいてことばまで支配された被疑者は、どうすればいいのか。「関西弁で複雑でやっかいなことを『ややこしい』と言いますが、関西の人がこれを全国共通語に翻訳して話すのは、それこそ『ややこしい』ですよ。無理に共通語を使っても、上手く語ることはできない。つまり、弱い立場にあっても、自分の気持ちや事実を訴えられる自分のことばは方言であり、自らを救う『砦』になり得ます。自分の方言で話す権利を『方言権』と定義しました」と札幌教授。弱い立場の人こそ方言権を行使し、司法や法曹関係者は被疑者や被告人が話す方言を理解する義務がある。ある具

体例として、札幌教授は岡山県で発生した自宅への放火事件を取り上げた。事件の争点は被告人の責任能力の有無。「火が燃えること、わかっていたと、それでいいの？」との検察官の問いに、取り調べ中にもかかわらず眠り込んでいた被告人は咄嗟に「いけん」と回答。検察官は「いけないことをした」との自白だと解釈。しかし被告人の「いけん」という岡山弁は「火事になるとはわかっていなかった」という意味での発言だった。結局検察側の自白の解釈は認められず、執行猶予のついた判決が下った。「方言が争点になる例は少なく、関係者には重視されにくいかもしれませんが。でも被疑者や被告人にとって、まして本当に無実であれば方言の一言一言に人生がかかって



いる場合もあります」と札埜教授は述べる。

2025年に開講した文学部・教育学特殊講義の一つ「甲山冤罪学」を担当する札埜教授は、心理学を専門とする福島由衣氏（早稲田大学助教）を始め、他領域の研究者と連携しながら「犯罪方言学」として研究の深化・発展を構想している。薬物依存者の社会復帰支援団体の関係者が発した「ことば」が今も心に残る。「捕まえる側の武器になる研究にはしないでほしい」。取り調べる側のことばへの意識がより鋭敏になれば改善されるかもしれない。一方で犯罪には被害者も存在する。共通語の取り調べでも冤罪は生まれる。『『愚者』としての自身の生きてありようも含め、迷いながら『法におけることば』を問い続けています」



札埜 和男

大阪府生まれ。慶應義塾大学法学部政治学科卒業。31年の教員生活で主に国語科を担当。高校教員在職中に博士号取得（文学・大阪大学）。2022年4月龍谷大学文学部哲学科に着任。自身が開発した「文学模擬裁判」を全国各地で指導。「日米文学模擬裁判の比較研究」が2025年度科学研究費助成事業に採択される。著書に『法廷における方言』（和泉書院）、『文学模擬裁判のつくりかた』（清水書院）、『大阪弁の深み』（PHP研究所）など。

07 Event Ryukoku Museum

夢でつながる教えの物語

秋季特別展『**仏教と夢**』

2025年9月20日(土)～11月24日(月・祝)

休館日：月曜日(ただし、10月13日・11月3日・11月24日は開館)、10月14日(火)、11月4日(火)

主催：龍谷ミュージアム、京都新聞、読売新聞社

誰も見ただことのある夢。目覚めとともに忘れてしまうことが多いが、古の人たちにとって夢は信仰の対象にもなるほどの影響力があった。吉祥な夢を記録したり、他人の夢を買い取って自分が見たと語る「夢買い」というものも存在していたという。「仏教においても、夢は修行や教えの道を照らす重要な意味を持つことがあり、夢にまつわる記録や美術作品などが数多く残っています。ただ多岐にわたるがゆえ、難しいテーマでもあったと思います」と話す岩田朋子学芸員がこの展覧会を企画。展覧会は「夢と靈験譚」「仏教經典に説かれる夢」「高僧がみた夢」「夢と儀礼」「夢と聖地」の5つの章で仏教における夢の表現を辿っていく構成に。見どころは、第2章での釈尊の「托胎靈夢(たくだいれいむ)」。「仏母・摩耶夫人(まやぶにん)がシッダールタ太子(のちの釈尊)を懐妊する際、靈獣とされた白く輝く象の夢を見たといひます(右頁の作品)。また、仏教伝播とともにこの夢のお話が継がれるにつれ、日本で描かれた「仏伝図」では白象に乗った太子が表されるなど、表現の変化

を比較するのも面白いです」と岩田学芸員。第3章では「西遊記」のモデルで知られる玄奘三蔵が天竺への道中で倒れた際、深沙大將(じんじゃだいしょう)や観音菩薩から叱咤激励を受ける夢を見たという場面を描いた作品を展示。また、若き快慶作の重要文化財「深沙大將立像」(鎌倉時代、京都・金剛院)も展示される。さらに、親鸞聖人が京都の六角堂で100日間の参籠をされた時、観音菩薩から「法然という僧を訪ね、その法を聞け」と夢の中で聞いたことから、新たな道を見出した「夢告」にまつわる作品を展示。その頃の若き姿「親鸞聖人坐像」(室町時代、京都・金戒光明寺)も見どころ。岩田学芸員は「夢が多くの僧に様々なかたちで影響を与えたのだと、仏教を身近に感じるきっかけになれば、うれしいです」と話す。仏教文献に伝わる夢の物語について、作品を通じて概観すること、今回の展覧会の醍醐味だ。



岩田 朋子 龍谷ミュージアム 学芸員



龍谷ミュージアム
Webサイト



仏伝浮彫「托胎靈夢」スワートまたはディール 1～2世紀



廃棄する「摘果りんご」を焼き菓子に 青森と京都をつないだ“アップル”リサイクル

経営学部・藤岡章子教授のゼミでは「未利用資源」を活用した商品開発や情報発信による地域の課題解決に取り組んでいる。その一環として、りんごの産地・青森県弘前市の「摘果りんご」を使った焼き菓子を開発・販売。今回はこの開発に携わった藤岡ゼミの4年生、今村朱里さんと、長年、りんごを通じて藤岡ゼミと協働する弘前市農林部長の澁谷明伸さんが弘前とりんご、商品への思いを語り合った。

今村: 藤岡ゼミでは2015年から弘前市のりんごを使った「若年層向けのりんごの消費活性化」に取り組み、りんごのカフェやポップアップストアをオープンしての販売、オウンドメディアでの情報発信をおこなってきました。

澁谷: 青森県弘前市は、日本一の生産量を誇るりんごの町です。市では大変重要なりんご産業の振興を図る専門部門「りんご課」を設置しています。藤岡ゼミとは、私が2020年にこの課に配属されてからのおつきあいですが、遠く離れた京都の大学が弘前とりんごの発信に取り組んでいることに驚きました。

今村: 私は青森出身で、高校時代に藤岡ゼミのりんごの取り組みを知って、龍谷大学に進学しました。私も「京都の大学生が青森のために」と驚き、故郷のりんごの役に立ちたいと思ったことがきっかけです。

澁谷: 日本一の生産量の一方で、弘前とりんご産業は高齢化と後継者問題、手間のかかるりんご栽培での人手不足など、様々な課題を抱えています。市では新しい栽培技術の導入、農家が新規就農者を直接指導する里親制度、藤岡ゼミでも取り組んでいたいただいた販路開拓といった課題解決の施策に注力しています。

今村: そんなりんごの課題について、藤岡ゼミのテーマである「未利用資源」から検証し、私たち6人のメンバーで取り組んだのが「摘果りんご」を使った商品開発です。

澁谷: りんごは1つの株から5〜6つの花が咲いて実がなるので、収穫する果実を選別し、その他の果実を摘み取ります。これが「摘果」です。養分を取り合うことなく、1つの果実をより大きく、よりおいしく育てるために大変重要な作業です。しかも、りんごの成長に合わせて、収穫まで2〜3回の摘果が必要で、樹になったりんごの約9割が摘果されるりんごと言われています。これだけ農家の負担が大きいにもかかわらず、摘果りんごは廃棄するしかありません。泣いて、食べることができないからです。そんな「摘果りんご」の商品化という難題に今村さんたちが挑戦すると聞いて、うれしく思いました。



「摘果りんごのマドレーヌ」龍谷メルシー・オンラインショップにて販売
<https://store.shopping.yahoo.co.jp/ryukokumerici-online/rm-b002p.html>

読者アンケートのプレゼントとしても登場。詳しくはP.50へ



澁谷 明伸 青森県弘前市農林部長。企画課から2020年に「りんご課」に異動。同年、龍谷IP事業「農学部×経営学部 産農学連携をベースとした複合領域型プロジェクトの推進～文理融合型キャンパス横断学修プログラムの構築を目指して～」の事前学習をコーディネート。2025年7月に経営学部講義「食農ビジネスのフロンティア」にて特別講義を実施。りんごを中心に弘前市の農業振興に注力。産官学連携も積極的におこなう。

今村 朱里 経営学部経営学科4年生。青森県立三本木高等学校出身。高校時代に、龍谷大学のパンフレットで紹介されていた、藤岡ゼミの取り組みを見て進学を決意し、京都での大学生活をスタート。企業との共同プロジェクトによって商品開発に至るプロセスや考え方、そしてビジネスマナーなどのスキルを修得。卒業後は社会貢献や地域活性化にもつながる商品企画を希望している。



今村:「摘果りんご」の活用方法は、株式会社
ビオスタイルが展開するフードブランド
「GOOD NATURE MARKET」の商品として、共
同開発することになりました。どんな商品に
するか、メンバーで考えたアイデアはドレッシ
ングや、歯みがき粉など、60案以上。決まった
のが「GOOD CACAO」シリーズの焼き菓子缶
としての開発。商品名は「日本茶に合う摘果
りんごのマドレーヌ」です。この焼き菓子シ
リーズは、ヨーグルトやチーズの製造過程で
出るホエイや、廃棄するカカオ豆の皮(カカオ
ハスク)を使ったアップサイクル商品であり、
私たちがめざす「摘果りんご」の活用にマッチ
していました。

澁谷:完成したマドレーヌをいただきましたが、
とてもおいしかったです。パッケージのデザイ
ンも目を引き、素材の説明で皆さんが摘果り
んごを「収穫前の幼いりんご」と表現されたこ

とに、「摘果りんご」は捨てるものではない、活
用できるものという思いが伝わってきました。

今村:摘果とはいえ、弘前のりんごのおいしさ
を味わえることにこだわりました。決め手と
なったのは、世界で初めて成功した摘果りん
ごのパウダーです。また、摘果りんごは収穫さ
れるりんごの約10倍もポリフェノールを含有
していることがわかりました。

澁谷:パウダー化や栄養素の高さは、今後、摘
果りんごの活用の強みになると思います。

今村:現在、新商品の開発も進めています。今
回使った「摘果りんご」は、既に別の商品に活
用されているものを仕入れました。そのため、
個々の農家の課題解決には至っていないの
で、農家の方から「摘果りんご」を直接仕入れ
ていくことを進めています。また、輸送の環境



大きく、美味しいりんごを育てるために、選別されて間引きされる「摘果りんご」

負荷やコスト削減のため、「摘果りんご」のパウダー化を弘前でおこなうことになり、澁谷さんにご協力いただきました。

澁谷:「摘果りんご」が皆さんのアイデアによって収益になることは、農家にとっても、弘前市としてもプラスになり、「地域産業」となる種を蒔いてくださったことは大変ありがたいです。今後の課題としては、農家がこの商品のために「摘果りんご」を収穫・確保するには、新たな手間と労力がかかるので、それに見合う価値やメリットをより明確にすることが必要ではないでしょうか。

今村:おっしゃる通りです。地域の課題を地域で解決し、地域に還元していくために、私は卒業までこのプロジェクトに携わっていきます。その一環として、青森の出身中学校で、故郷のりんごの課題や今回の商品開発について

講演をおこないました。すると、「摘果りんごを使って何かしてみたい」「龍谷大学に入学したい」と話してくれた子がいて、うれしかったです。

澁谷:今村さんのように青森出身者が県外で学び、故郷の力になってくれることは理想的です。私を含め、県内にいると、課題や価値に気づかないことがある。それに対して、藤岡ゼミの皆さんは、新しい視点・発想で新しい風を吹かせてくれます。もちろん、弘前には、りんご産業の持続と故郷の活性化のために何かしたいと考えている人がたくさんいます。私はそういった故郷の人と龍谷大学をつないでいくために、これからも力を尽くしていきます。

今村:私は京都の龍谷大学に進学したことで、りんごの魅力に気づきました。商品だけでなく、弘前のりんごの価値がさらに高まり、未来につなげていけるようにがんばりたいです。



09 My Campus マイキャンパス

タイトル「梅雨の晴れ間の深草学舎」

Tさん 2025年6月撮影(深草キャンパス)

「My Campus」ページでは、時代の流れとともに変わりゆく龍谷大学の「今」を感じていただけるキャンパス風景写真を、読者の皆さまから募り紹介しています。キャンパスの素敵な瞬間を是非写真に収めてご応募ください。

応募写真の中から厳選の上、次号の本ページを飾らせていただきます。

応募締切

2026年1月9日(金)

募集内容

龍谷大学のキャンパスを撮影した写真
(本学と関連のある場所・施設等)

応募方法

以下のフォームからご応募ください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/mycampus/>



注意事項

- ・2025年9月以降に本人が撮影した写真に限ります。
- ・1点につき10MB以内のjpgファイル。
- ・誌面の都合上、掲載は横サイズのトリミングとなります。撮影の際にはご注意ください。
- ・組写真、合成写真、過度の画像補正など実像に反する写真は不可。
- ・著作権・肖像権の侵害には十分に注意してください。
- ・応募に係る個人情報は本事業以外には利用しません。
- ・応募写真につきましては、龍谷大学が広報活動のために自由に利用できる権利を許諾していただきます。

応募写真は以下から閲覧していただけます。
龍谷大学の「今」を是非ご覧ください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/mycampus/>



最新情報



「2025オーストリアジュニア国際大会」 柔道部木村穂花選手が銅メダルを獲得

2025年5月31日と6月1日に、オーストリア・ウィーンで開催された「2025オーストリアジュニア国際大会」の個人戦女子63kg級に柔道部の木村穂花選手(経営学部1年)が出場し、銅メダルを獲得した。連戦による疲労が懸念されるなか5試合を戦い抜き、積極的な攻めと粘り強い対応で健闘。3位決定戦では見事な一本勝ちを収め、大学入学後初の国際大会で堂々たる結果となった。



「第48回全日本アンサンブルコンテスト」 3大会連続・通算11回目の金賞受賞 完成度の高いアンサンブルを披露

吹奏楽部のサクソフォン四重奏メンバー(3年生3人・1年生1人)は2025年3月に関西代表として福井県立音楽堂で開催された「第48回全日本アンサンブルコンテスト(全日本吹奏楽連盟、朝日新聞社主催)」に出場し、J.リヴィエ作曲「グラヴェとプレスト」を演奏。積極的に意見を交わし、互いに歩み寄りながら自信をもって創り上げた完成度の高いアンサンブルを披露して見事金賞を受賞した。



「2025年度関西選手権競漕大会」 端艇部が男子エイトで2連覇

2025年7月に大阪府立漕艇センターで開催された「2025年度関西選手権競漕大会」において、端艇部が2024年に引き続き、男子エイトで見事優勝に輝いた。また、男子クォドルブルおよび男子フォアでそれぞれ4位。女子では、舵手つきフォア4位、クォドルブルが3位、ペアが5位と健闘。春先の苦難を乗り越えた選手たちの「勝利への執念」が実を結んだ。全日本大学選手権に向け、更なる飛躍が期待される。



市川翔太選手がU20日本代表に選出 強化試合で2トライの大活躍

2025年4月にJ-GREEN堺（大阪府堺市堺区）で開催された公益財団法人日本ラグビーフットボール協会主催「U20日本代表候補関西西合宿」にラグビー部の市川翔太選手（政策学部2年）が参加し、U20日本代表メンバーに選出された。さらに、ニュージーランド学生代表（NZU）との強化試合では、2つのトライを決める活躍を見せ、チームの勝利に大きく貢献した。世界と戦う貴重な経験を糧に、さらなる成長と龍谷大学ラグビー部への好影響が期待される。



女子初優勝、相撲部の躍進 「第16回全日本女子相撲岐阜大会」

2025年7月に岐阜メモリアルセンター相撲場（岐阜県岐阜市）で開催された「第16回全日本女子相撲岐阜大会」において、矢口愛利菜選手（短期大学部2年）が一般の部個人65kg以上73kg未満級に出場。終始前に出る積極的な取り口で4試合を戦い抜き、見事初優勝を勝ち取った。高校生以上が出場する全国大会での制覇は、2024年の第11回全国学生女子相撲選手権大会に続く快挙。



深草キャンパス新校舎の竣工式を挙 教育・研究・社会貢献活動の実現が可能に

龍谷大学は2025年3月、新棟「灯炬館」「慧光館」「聞思館」および上空通路「結連橋」の竣工式を眞真館にて挙行了。これまで一般道路で隔てられていた教育・研究活動中心の「北エリア」と、社会貢献を加えた「南エリア」が一体化され、教育・研究・社会貢献活動の実現が可能となった。記念植樹やパレード、陶板画の除幕式もおこなわれ、多くの来場者が新たなキャンパスの象徴を祝福した。



ウェルビーイングの追求や 共生社会の実現に向け びあ総研と連携協定を締結

龍谷大学は2025年3月、社会学部の深草キャンパス移転を契機にびあ総合研究所と、文化・芸術・エンタテインメント・スポーツ等を通じたウェルビーイングの追求や共生社会の実現をめざした協定を締結。社会学部の講義や社会的課題をテーマとしたプロジェクト型授業など、教育・人材育成の連携を推進する。2028年の事業開始をめざす「共創HUB京都」を拠点に、新たな価値創造と社会実装に向けた連携方策を検討する。



「龍谷の森」における 友好森林関係の覚書を締結

龍谷大学は2025年2月、台湾の農業部林業及自然保育署及新竹分署（農業省森林・自然保護庁新竹支所）と里山賽夏（南庄地区蓬萊部落の原住民集落）との間で「龍谷の森」における友好森林関係の覚書を締結した。本学の「ネイチャーポジティブ宣言」の具体化を図る取り組みであり、里山を拠点とした教育・研究・国際交流を通じ、自然共生社会の実現に寄与することをめざす。



学生生活の充実を目的として 親和会（保護者会）の学生応援企画

近年の物価高騰の影響を受ける学生への支援として、栄養バランスのとれた食支援を実施。1食100円で提供する「百縁夕食」を拡充し、「百縁朝食」や農学研究科の学生がメニュー開発に取り組んだ「親和会サラダ」の提供をおこなった。2025年7月からは、新たに大宮キャンパスの「前田珈琲」黎明館店でも朝食の提供が開始され、経済・食・健康の多方面から学生生活を支える取り組みが広がっている。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGsに対応した 「THEインパクトランキング2025」で 私大4位にランクイン

大学の社会貢献度を国連の持続可能な開発目標（SDGs）の枠組みを使って可視化する「THEインパクトランキング2025」（英タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）社）が2025年6月に発表され、龍谷大学は総合順位において国内私立大学「4位」にランクインした。本学は仏教SDGsをきっかけ社会課題解決に向けた取り組みを積極的に展開してきた。今回の結果はそうした取り組みが国際的に高く評価された結果といえる。



東京国立博物館と大谷探検隊将来品の 調査研究に関する協定を締結

龍谷大学は1902年に大谷光瑞師が組織した大谷探検隊の将来品を所蔵しており、その全体像を解明するため東京国立博物館と国際的な博物館連携に関する協定を2025年3月に締結した。本学は世界仏教文化研究センターを中心に大谷探検隊に関する総合的な研究を推進してきた。今回の協定締結により、日本におけるシルクロード仏教文化研究の振興に寄与していく。



学生のU・I・Jターン就職促進を目的に 富山県と就職支援に関する協定を締結

龍谷大学は2025年6月、富山県と学生のU・I・Jターン就職を推進し、地域産業の活性化に貢献することを目的とした就職支援協定を締結した。県内企業情報の提供や各イベントの周知、インターンシップ支援、学内でのキャリア形成、就職活動支援など幅広く連携を図り、北陸3県（石川県・福井県・富山県）を含む全国19府県との協定を通じて、学生の進路選択の拡大と、多様なキャリアパスを支援していく。



水と土から探る生態系の回復力 生態系レジリエンス診断評価技術を開発

台湾大学漁業科学研究所の鄭宛萱博士（龍谷大学生物多様性科学研究センター客員研究員）と先端理工学部の三木健教授らによる共同研究チームは、環境中の細菌叢に着目し、生態系レジリエンスを定量的に評価する新技術を開発。水や土壌のサンプルから環境DNAを解析することで、簡便かつ広範囲への応用が可能。自然環境から都市空間まで、生態系の壊れにくさを診断する革新的な手法だ。



関西パビリオン京都エリアにて 茶道部釣寂会が日本の伝統文化を発信

2025年4月、大阪・関西万博の関西パビリオン京都エリアの茶席にて、茶道部釣寂会が藪内流の作法で呈茶をおこない、140名のお客様に心を込めておもてなした。本学のほか、付属平安高校や大阪市内の中学校茶道部からも参加し、日本文化を若い世代で継承・発信する貴重な機会となった。今後も茶道を通じた文化交流と学びを深めていく。



オリジナル紅茶を活用したクラフトビールを開発 龍谷大学×近江麦酒

龍谷大学では、経営学部、農学部、文学部、心理学部の学生や教職員が連携し、各キャンパスを「香り」で表現したオリジナル紅茶を開発してきた。その紅茶のフレーバーを使用し、龍谷メルシーが3種のクラフトビール「TEA ALE」を開発。普段紅茶を飲まない方にもオリジナル紅茶や本学の魅力を知ってもらう機会創出をめざす。



龍谷メルシー・オンラインショップ
<https://store.shopping.yahoo.co.jp/ryukokumerci-online/rm005.html>



アジア最大級の環境展示会 「2025NEW環境展」に出展

龍谷大学 龍谷エクステンションセンター (REC) は、2025年5月28日から30日の3日間、東京ビッグサイトで開催された「2025NEW環境展」に出展。国内外から700を超える出展者が集うアジア最大級の環境展示会において、本学は先端理工学部や農学部の3人の教員の各分野の研究シーズを展示し、150名を超える来訪者に説明をおこなった。RECでは、産学連携を推進するとともに、本学ブランド価値の発信をおこなっていく。



「龍谷の森」の生物多様性維持向上をめざし ゴミ拾いボランティア活動を実施

2025年6月に、環境省の自然共生サイトに認定されている瀬田キャンパスの「龍谷の森」にて教職員と学生あわせて32人がゴミの回収ボランティアに参加した。「環境月間」における重要な取り組みの一環として地域や企業と連携し、総量約5m³、重量約600kgにおよぶゴミが回収された。約8割がリサイクル対象となり、環境課題への気づきを促すとともに生物多様性の維持・向上に向けた行動の契機となった。



オリジナルレトルトカレー「BEEF CURRY」を開発 農学部給食経営管理栄養学研究室×カレータイム

農学部食品栄養学給食経営管理栄養学研究室(朝見祐也教授)とカレー専門店「カレータイム」が、近江牛を使ったビーフカレーのレトルト商品「BEEF CURRY」を共同開発。農学部実習農場で収穫する「龍谷米」に合う味に仕上げ、大学院農学研究科修士課程の学生がアレンジレシピも考案した。



龍谷メルシー・オンラインショップ
<https://store.shopping.yahoo.co.jp/ryukokumerci-online/rm006.html>



農学部学生が有志でプロジェクトを発足 オリジナルコーヒー「ROOT」「LEAF」を開発

龍谷大学農学部が企画から商品化まで一貫して取り組んだオリジナルブレンドコーヒー「ROOT」と「LEAF」を開発。コーヒーが苦手な方でも親しみやすく、愛好家にも満足の味わいを追求。豆の選定・ブレンド・パッケージに至るまで、学生の想いが詰まった2種類。コーヒーの魅力を幅広い層に届けることをめざす。



龍谷メルシー・オンラインショップ
<https://store.shopping.yahoo.co.jp/ryukokumerci-online/rm-n001.html>



学生の起業や主体的活動を支援 創業支援ブース(TREP)がリニューアル

学生の起業や主体的活動を支援する「創業支援ブース」(愛称:TREP<The Ryukoku Entrepreneurship Place>)を、2025年4月の竣工に伴い慧光館2階に移転。個人・チームでの活動に適したエリアと、ミーティングに特化したエリアを整備。「他者受容」「環境調和」「社会変革」という3つの理念を軸に、ピッチでの活動資金提供、専門家によるメンタリング、合宿形式のプログラム等、挑戦する学生の活動を多方面から支援する。



「ネイチャーポジティブへの挑戦ー生物多様性の喪失は誰の問題で誰がどう解くのか」 産官学金連携のシンポジウムを開催

龍谷大学生物多様性科学研究センターは「ネイチャーポジティブへの挑戦」をテーマに、産官学金連携シンポジウムを2025年3月に大宮キャンパスで開催。生物多様性データの活用や社会システムの構築に向けた活発な議論がおこなわれ、多様なステークホルダーの協働の重要性について議論を深めた。参加者からは「隠れた要点をあぶり出すような意義深いシンポジウムだった」という声が寄せられた。



全教員執筆による新しい政策学の教科書 「市民のための政策学」を出版

龍谷大学政策学部は2025年に創立15年を迎えるにあたり、政策学の魅力を広く伝えることを目的として、学び始める人向けの教科書『市民のための政策学』を3月に出版した。所属する教員全員が執筆し、政策学の基礎から実社会の課題まで、教員の様々な専門分野・知見をまとめ多角的に解説されている。幅広い学問領域をバランスよく取り入れ、興味や学びたいテーマに合わせて読み進めることができる受験生や大学1年生に最適な一冊。



「東京プライド2025」 3年連続4回目のブース出展 学生と教職員が多様性への共感を発信

性のあり方にかかわらず誰もが自分らしく生きることができる社会をめざすアジア最大級のイベント「東京プライド2025」が6月に東京都・代々木公園で開催された。本学からは、実践真宗学研究科と社会学部の学生、教職員が共同で出展。ユニークなシール投票や「グチコレ」などのワークショップ、また仏前結婚式や同性婚に関するアンケートなどを実施。多くの来場者と交流し、多様性への学びと共感を深めた。

11 Book Café

新刊紹介

※は大学から出版助成を受けた書籍です。
著者編者等は本学関係者のみ、お名前を掲載しております。



龍谷大学仏教文化研究叢書55
貞慶撰『唯識論尋思鈔』の研究
「別要」教理篇・中1

楠 淳證（龍谷大学名誉教授）編著
法蔵館／19,800円（税込）

*



龍谷大学仏教文化研究叢書56
欧文反省雑誌 復刻版
（第3巻・第4巻）

中西 直樹（文学部教授）・
嵩 満也（国際学部教授）編著
三人社／55,000円（税込）

*



龍谷大学社会科学研究所叢書 第147巻
脱炭素地域づくりを支える人材
日欧の実践から学ぶ

的場 信敬（政策学部教授）編
日本評論社／6,600円（税込）

*



龍谷大学社会科学研究所叢書 第148巻
土地空間の近代法的把握
地域資源管理をめぐって

牛尾 洋也（法学部教授）編
日本評論社／7,480円（税込）

*



龍谷大学社会科学研究所叢書 第149巻
若者と民主主義の今
その遠心力と求心力

只友 景士（政策学部教授）・
奥野 恒久（政策学部教授）編著
晃洋書房／4,180円（税込）

*



龍谷大学社会科学研究所叢書 第150巻
ヨーロッパ私法・消費者法の
現代的課題と日本法

中田 邦博（法学部教授）・
若林 三奈（法学部教授）編
日本評論社／8,140円（税込）

*



團藤重光日記
1978—1981

畠山 亮（法学部教授）・
福島 至（龍谷大学名誉教授）共編著
日本評論社／4,400円（税込）

*



転換期の労働政治
多様化する就労形態と日韓労働組合の戦略

安 周永（政策学部教授）著
ナカニシヤ出版／3,850円（税込）

*



「公害地域再生」とは何か
大阪・西淀川「あおぞら財団」の軌跡と未来

清水 万由子（政策学部教授）著
藤原書店／4,620円（税込）

*



生き物の死なせ方
共生・共存からはみ出した生物たちの社会学

渡邊 悟史（社会学部准教授）著
ナカニシヤ出版／2,970円（税込）

*



スウェーデンの政党政治と民主主義*

渡辺 博明 (法学部教授) 著
晃洋書房 / 5,280円 (税込)



インド哲学の万華鏡

桂 紹隆 (龍谷大学名誉教授) 監修
志賀 浄邦 (文学部教授) 共著
早島 慧 (国際学部准教授) 共著
春秋社 / 3,850円 (税込)



越境するアフォリズム

シンポジウム「アフォリズムと通念
一日仏独文学をめぐって」論文集

國重 裕 (経営学部教授) 共著
アプレミディ / 2,310円 (税込)



芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚

澤西 祐典 (国際学部准教授) 共編訳
岩波文庫 / 1,573円 (税込)



芥川龍之介における海外文学受容

旧蔵書を通して見える風景

澤西 祐典 (国際学部准教授) 著
ひつじ書房 / 7,920円 (税込)



制御工学

渋谷 恒司 (先端理工学部教授) 著
森北出版 / 2,860円 (税込)



外国人受け入れへの日本語教育の新しい取り組み

田尻 英三 (龍谷大学名誉教授) 編著
ひつじ書房 / 2,200円 (税込)



新しい社会教育・生涯学習論

林 美輝 (文学部教授) 編著
ミネルヴァ書房 / 2,970円 (税込)



少年の心

ロバート・フロスト詩集

藤本 雅樹 (龍谷大学名誉教授) 翻訳
小鳥遊書房 / 2,860円 (税込)



大阪弁の深み

その独特の魅力を味わう

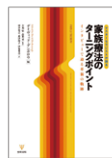
札幌 和男 (文学部教授) 著
PHP研究所 / 1,155円 (税込)



取り戻さな!我した琉球先祖ぬ骨神

琉球民族脱植民地化闘争の記録
一 京大遺骨返還訴訟 / 沖縄県情報公開訴訟一

松島 泰勝 (経済学部教授) 共編著
琉球館 / 2,750円 (税込)



マスターセラピストが語る 家族療法のターニングポイント

インタビューで辿る革新の軌跡

吉川 悟 (心理学部教授) 監訳
志田 望 (心理学部講師) 監訳
赤津 玲子 (心理学部教授) 訳
伊東 秀章 (心理学部准教授) 訳
田中 智之 (心理学部非常勤講師) 訳
金剛出版 / 3,520円 (税込)

広報誌「龍谷」100号読者アンケート&プレゼントのご案内

創刊100号を記念して、100名様にプレゼント

今後の広報誌づくりのため、皆さまのご意見をお聞かせください。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選でご希望の読者プレゼントが当たります。今回は創刊100号を記念して、100名様にプレゼント。龍大ロゴ入りポーチ、Connect, Unlimitedの対談企画(P.36-39)で登場した経営学部×GOOD NATURE MARKET「日本茶に合う摘果りんごのマドレーヌ」、龍谷ミュージアムのペア招待券をご用意しています。ぜひ好きなプレゼントをお選びください。

お寄せいただいた感想・近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。

当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

締切 2026年1月9日(金)

Web応募フォーム <https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>



龍大ロゴ入りポーチ…70名様

サイズ:約W290×H210mm

リサイクルコットンを使用したB5サイズの様々なシーンに使える
龍大ロゴ入りポーチです。



経営学部藤岡ゼミ×GOOD NATURE MARKET

「日本茶に合う摘果りんごのマドレーヌ」(3個入り)…20名様

摘果りんごを使用した、日本茶に合う爽やかな香りとコクが楽しめるマドレーヌです。

未利用資源である摘果りんごの活用を目的に経営学部藤岡ゼミが開発しました。



龍谷ミュージアム ペア招待券 … 10名様

短期大学部メモリアルサイトへのメッセージ募集

2024年度入学生を最後に短期大学部は学生募集を停止し、在学生がいなくなれば70有余年の歴史を閉じることになります。これまでの歴史や各種証明書申込方法等の卒業生向け情報を掲載するメモリアルサイトを準備中です。

サイトに卒業生・専攻科修了生からのメッセージを掲載予定です。下記のURLまたはQRコードから在学中の思い出などのメッセージをぜひお寄せください。

投稿メッセージ入力フォーム

<https://forms.office.com/r/P29rgqaaLd>

メッセージ受付期間

2025年12月26日（金）まで



読者のひろば

このような龍大について詳しく知れる広報があると知らなかったのも、これからも読みたいです。次回の発行も楽しみです。（在学生Kさん）

龍谷の広報誌は学生、卒業生の活躍を掲載していて読み応えがあります。是非、続けてください。（卒業生Fさん）

広報誌「龍谷」のデジタル版配信について

広報誌「龍谷」はデジタル版でも閲覧いただけます。

下記URLまたはQRコードからメールマガジンにご登録いただくと、デジタル版発行のご案内をお届けします。

冊子の送付停止を希望される方はフォームからご申請ください。

広報誌「龍谷」メールマガジン登録・冊子送付停止申請

<https://www.ryukoku.ac.jp/prdigital/>



広報誌「龍谷」デジタルライブラリー
（過去の広報誌もご覧いただけます）

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/>



編集委員：山崎 正幸、木村 睦、野呂 靖、松永 敬子

事務局：東山 加奈子、谷 穂乃美

広報誌「龍谷」100号

2025年9月22日発行

編集：広報誌「龍谷」編集委員会

制作：龍谷大学 学長室（広報）

発行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67

電話 075 (642) 1111（代表）

龍谷大学ホームページURL

<https://www.ryukoku.ac.jp/>





公式 X 「龍谷大学広報」

[X.com/ryukoku_univ_pr](https://x.com/ryukoku_univ_pr)



公式 Instagram 「龍谷大学」

www.instagram.com/ryukokuuniversity



公式 Facebook 「龍谷大学」

www.facebook.com/RyukokuUniversity/



公式 YouTube 「龍谷大学」

www.youtube.com/user/RyukokuUniversity